

サウンド

SOUND

2008・1

第23号



財団法人 サウンド技術振興財団

音の散歩路

～伊能忠敬と水音とお囃子と～



東京駅からJR総武本線、成田線と乗り継ぐこと2時間弱で千葉県の佐原（さわら）駅に到着する（写真-1）。上総の小江戸と呼ばれ時代を感じさせる建物がたくさん残っている（写真-2）。佐原が特に名高いのは200年ほど前に歩いて日本地図を作成した伊能忠敬の出生地であることだ。町を散策していると立派な銅像に遭遇する（写真-3）。50歳で隠居の身分になってから江戸へ出て天文学、地理学を学んでいる。そして55歳から17年間にわたり全国各地を測り、亡くなった後は弟子に引き継がれて3年後に日本地図が完成した。最初の東日本の測量は自費を投じたが、地図の正確さに感心した幕府が後半の西日本の測量では費用を出している。

佐原の町の真ん中を利根川の支流である小野



写真-1

川がゆったり流れている（写真-4）。両岸には江戸時代の土蔵造りの商家が残っている。銚子と江戸を結ぶ利根川水運の商業地として栄えた名残である。修復しながら現在でも商いを続けている店も多い。平成8年12月文化省から「重要伝統的建造物群保存地区」の指定を受けている。その中心にジャージャー橋がある（写真-5、表紙の写真）。江戸時代の初期に造られたかんがい用水を送るための箱型の樋であったが、やがて手摺をつけて人々が渡りだした。大樋から水が溢れ落ちるところからジャージャー橋と呼ばれるようになった。今のものは平成4年に架け替えられ、30分毎に水をくみ上げては再現している。溢れ落ちる水音は「残したい日本の音風景100選」である。橋の後方の建物は伊能忠敬が書院を設計したという旧宅で、佐原の名主・村方後見を務め、酒造業を営んでいたという。その店舗を抜け書院に面した庭に回ると質素ではあるがキリリとした佇まいが見てとれる（写真-6）。そして旧宅からジャージャー橋を渡ればすぐに伊能忠敬記念館がある。当時使用した測量道具や製作地図、日記、書簡などが展示されている。現在の地図と比べても誤差は少なく大正時代まで約100年の間使用されていたという。

ジャージャー橋横に小野川舟めぐりの乗り場がある。利根川の水門を少しだけ出て、その形からたぬき島と呼ばれている小さな島を回るコースである（写真-7）。途中低い橋をくぐる



写真-2



写真-3



写真-4



写真-5

たびにゲーゲーと軋み音をたてて屋根の幌が下がり首をすくめる（写真-8）。地元のおばあさんが菅笠に赤い前掛け、もんべ姿で二人組みになって舵をとる。巻きつけた手ぬぐいの間か

らのぞく日焼け顔におやっと思わせる白と青のスニーカー、ひょいひょいと軽やかに長棹を操る身のこなし、加えてご座敷船のゆるやかな揺れがひとつになって心地よい。

佐原にはもう一つ有名なものとして重要無形民俗文化財の「佐原の山車行事」がある。小野川を挟んで東側区域の本宿が7月に、西側の新宿が10月に祭礼を行なう。本宿は10台、新宿は15台の山車があり、小さな町をお囃子とともに引き回される。5万人弱の住民に対して約30万の観光客で溢れるという。山車会館では2台の山車が交互に展示されている（写真-9）。江戸後期から昭和初期の名工がつくったという身の丈5メートル近くの人形が見下ろしている。写真は太田道灌であるが、他に神武天皇や源義経、浦嶋太郎まですべてが巨大人形山車である。夕闇の町を薄明かりと祭りの喧騒に浮かび上がる巨人の群れが次々と引き回される幻想的シーンはビデオで鑑賞できる。また、お囃子でつかう笛や太鼓や鼓も展示されている。小さな町に随分と立派な山車があるが、これも利根川水運



写真-6



写真-7



写真-8

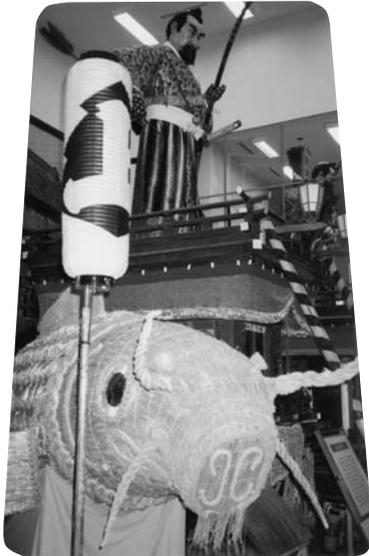


写真-9



写真-10



写真-11

の繁栄から「お江戸みたけりゃ佐原へござれ佐原本町江戸まさり」というほど強く意識して江戸より優れた祭りをつくろうとした伝統のなせる技であろう。佐原から九州に嫁いだ80歳代のおばあちゃんが「人々の歩く草履の音がまず聞こえてそれからお囃子と山車が聞こえてくる音が懐かしくてたまらない」と耳にした。故郷の祭体験がこころ深く根ざし、季節が近づくとき音を媒体として若かりし頃の高揚した気分が誘発されてくるのであろう。

この他に、栄えていた頃の名残として三菱館（旧三菱銀行）がある（写真-10）。今は観光案内や演奏会などのイベント会場として使われている。また、町の中心から2キロほど離れたところには香取神宮もある（写真-11）。時間が許せば訪れたい。

佐原は利根川沿いの小さな町ではあるが、小江戸の歴史と商人の心意気を素朴に色濃く残した町である。

（財団 江沢記）